

## ～資料館資料編～ ■「日本遺産『山寺と紅花』関連企画展 松尾芭蕉とその周辺」より

資料館では、「日本遺産『山寺と紅花』関連企画展 松尾芭蕉とその周辺」を開催しております。展示中の作品から、今回は与謝蕪村筆『奥の細道図扇面』をご紹介します。

与謝蕪村（1716～1783）は江戸時代中期に活躍した俳諧師・文人画家です。代表作に池大雅との共作『十便十宜図』（国宝）や、『奥の細道図屏風』（山形美術館・重文）などがあり、特に題材を松尾芭蕉の「おくのほそ道」にとった一連の『奥の細道図』は屏風や画卷として複数現存しており、軸装の本作もこの一群に含まれるものです。

本作では琵琶を掻き鳴らす琵琶法師と腕枕で寝そべる芭蕉が扇面に描かれています。同じ画面にいる二人ですが、実は「末の松山・塩竈」と「尾花沢」という全く別の空間にいるということが詞書によってわかります。「おくのほそ道」本文では二つの間に「松島」「瑞巖寺」「石の巻」「平泉」「尿前の関」といった小題が入り、また実際の旅程でも五月八日・塩竈、五月十七日・尾花沢（いずれも旧暦）というように、トピックとしても時間・空間としてもだいたい隔たりがあります。さらにこの扇面では先に尾花沢、後に「末の松山・塩竈」という本来とは逆順の配置となります。このように前後関係や内容的距離に捉われずテキストを再構成することで、あたかも「琵琶法師の音を聞き入って『ねまる』芭蕉」という本文には描かれない情景を巧みに演出しています。



そんな琵琶法師や芭蕉は、即興的な線やゆがんだ線で表され、ともすると身体的な整合性もとれていないのですが、のびのびとした自由さが感じられます。本作は「俳画」というジャンルに属しており、俳諧の世界観を表現したおかしみや軽快さ、さっぱりとした趣が特徴です。五七五で表す発句（俳句）は、同じく短詩型文学の和歌・短歌からさらに14音を切り離し、より短く簡潔な表現のために不要なものは勿論、時には必要と思われる要素まで削り取ってしまいます。そのようにして情報を極限まで絞った短詩は、どこか物足りなさを感じると同時に、未完結であるが故の不思議な余韻が生まれます。そしてそれは自由に発想を飛躍させられる余白でもあり、俳句の魅力にもつながるものです。

そんな超短詩型の発句と対になって描かれるのが、逆に描き込まれた再現性の高いものであれば、せっかくの余韻が阻害されてしまうように思えます。ここにはやはり、同じように簡略で緩さのある絵がほしいところです。本作の琵琶法師や芭蕉の寝姿も、ゆるゆるとして伸びやかで、それが「涼しさを我が宿にしてねまるなり」の句と共鳴しています。さらに大小・肥瘦のある詞書の書体と支え合うことで書・画・詩三位一体の芸術を成しているといえるでしょう。

「日本遺産『山寺と紅花』関連企画展 松尾芭蕉とその周辺」は8月28日（日）まで



## 大石田町公式アカウント開設

## LINEはじめました

防災情報などを  
受け取ることができます。

友だち登録を  
お願いします！

## 登録方法

右の二次元コードを読み  
取って友だちに追加して  
ください。



大石田町公式LINE

## 防災放送の内容を

## 電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時（夕方6時のメロディ等）放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL35-2111（内線218）

## 町の人口 令和4年7月1日現在

世帯数	2,265戸	(-1)
総人口	6,419人	(-20)
男	3,182人	(-10)
女	3,237人	(-10)

## (6月中の異動)

出生	0人	転入	7人
死亡	13人	転出	14人

※この人数は外国人も含めたものです。